



古道の怪



川崎ゆきお

「消えた？」

「はい、人が消えたのです」

獵師は思い当たらないことがないわけではないが、それはないだろうと、思っていた。だから、思い当たらないと答えた。

「この道は古道なんですよ」

「ああ、古くあるある山道らしいねえ。大きな神社に繋がっていたらしいけど、もうないよ。そんな山の上の神社は」

「そうですねえ。お寺なら分かりますが。山寺とか言いますしね。お寺の総本山も山ですしね」

「詳しいねえ。あなた誰」

「行方不明になった人を捜しています」

「この山で迷ったのかい」

「そうだと思いますが」

「春のこの季節、遭難するようなことはないよ。元々暖かい土地だし、雪が積もってもしれてる。スキーなど出来ないしね。第一高くない」

「そうですねえ。頂上まで木が茂っています」

「麓の木と変わらないだろ。それほど高くないってことさ。しかし、熊がいるよ。わしは猪か鹿しか狙わないけど」

「それで、この古道なんです」

「ああ、奥の一番高い山まで続いているよ。しかし、ここはわしはあまり使わない」

「やはり、何かあるのですね」

「人の気配がね」

「やはり」

「わしを感じるんじゃない、獣たちが知っておる。代々伝わるのかねえ。人が通る道だから。今は、殆ど人は歩いていないけど。それでも気配だけは残るんだ」

「高貴な方も、ここを通過して神社へ向かわれたとか」

「歩いてじゃないだろ。わしでもしんどいよ。奥山まで行くのはね。だから、輿か、駕籠だろ。ぎりぎり通れるんじゃないのかな。きっとそれが通れるように、地均ししたんだらうねえ」

「まさに道を造ると言うことですね」

「そうだなあ。それで人の手が入っておるから、獣は気配で分かるんだらうなあ。石地藏とか、石塔とか、いろいろ残っているだろ。残骸が。ここで行き倒れた人の石饅頭もあったよ。親父から、ここは通るなと言われたなあ」

「それで、ここで行方不明になった人なんです、何かご存じありませんか」

「迷い込みそうな枝道なら、わしもよく入り込むから分かるんだが、何せ山は広い。これが禿げ山なら、すぐに分かるんだけどねえ。そうすると逆に獣はいない。だから、わしも狩りには出ない」

「何か神秘的なことが起こって、消えたとかの噂はありませんか」

獵師はドキリとした。思い当たることなのだが、それは言わない方がいいことだった。

「山で神隠しに逢ったとかの伝承があるはずなのですが、この山でも」

的を得てきたので、漁師は黙った。

「その人は外国人でして、古道に興味を抱いて、遊びに来たらしいのです。メッカ巡礼のようなものかもしれないと」

「外人さんかね」

「はい」

「髪の毛は」

「茶色いです。目は青いです」

「赤毛の青眼」

「はあ？」

漁師は親父から聞いた話を思い出したが、黙った。

「神隠しじゃないのですか」

と、聞かれた漁師は、しばらく思案した。実際にはそれほど深く考えたわけではない。

「成ったんだろうなあ」

「はあ？」

「成ったんだろうなあ」

「何にですか」

「山の神様にな」

漁師は、そのまま立ち去った。

了